

特集

民話から みんな話へ

―昔々、あるところに―
親から子へ、子から孫へと語り継がれてきた
猪苗代の民話は、町の財産
しかし、その財産が、苦境に立たされています
民話が、家庭で話されることは
ほとんどなく、民話の舞台となった
場所は荒れ果ててしまっています
先人たちが残したこの町の伝説であり、
物語である「民話」
今後、民話を未来につなげていくのか
皆さん、一緒に考えてください

民話は先人たちのメッセージ

猪苗代にとって民話は、米やソバなどの農作物と一緒に。あつて当たり前のものなのです。近年、地域の農産物の地産地消が進められています。民話も地産地消しなければ、未来につながりません。

内容、なまりやアクセントなどを、原形に近い形で、この場所ですぐに語り継いでいく。地域の方言をつないでいくという意味でも、大変重要な意味があります。何代にもわたって語り続けられてきた民話には、さまざまな教訓が含まれています。それは、先人たちからわたしたちに伝えられた、厳しく貧しい時代を力強く生き抜くためのメッセージだったのかも知れません。



いなわしろ民話の会
会長 鈴木 清孝

民話は人間の真実の姿を映す

民話や神話の舞台は、今の生活からかけ離れていますが、その時代を生きた庶民の真実の姿を映し出しています。どこの誰がとはつきり言ってしまうところがないで、わざと「昔々あるところに」とぼかして話を始めます。政治家や役人には逆らえなかった時代。庶民は不満を物語の中に隠し、登場人物に本音を語らせ、上手に憂さを晴らしていたのです。

「カッとなってやった」などと、直情的すぎるくらいのある現代の子どもたち。民話に出てくる、生きていくためのたくましさや上手に気分転換をするしただかさを学び、人間的に強くなってほしいと思います。



猪苗代町教育長
土屋 重憲

猪苗代の 地名の話

猪苗代に伝わる民話

昔々のこと。
猪苗代は、今のよう田んぼではなく、アシなどの雑草が生い茂る、湿地しかありませんでした。

畑は、猫の額ほどの小さな畑があっただけ。長瀬川は暴れ川と呼ばれ、雨が降るとすぐにあふれて洪水をおこし、作物をだめにしていました。そういう場所なので、少し雨が降ると

「ああ、今日も雨が。雨が降ると、作物はみんな流れてしまう。食べるものはないし、困ったなあ」と、村人は困り果てていました。

そんな様子を見ていた神様、大山祇命の神は「村人は大変困っている。何とか助けてやらなければ。どうしたらいいだろう」と思案していました。

すると、神様の前を勢いよく走り回る動物がいました。よく見ると猪でした。

「お前、何をしているんだい」神様が声をかけると、

「おれは、走り回るのが仕事だから」猪は答えました。

「じゃあひとつ、村人たちのためにこの辺を走り回ってくれないか」

「ああ、いいですよ」

そう言うと猪は仲間を呼び集め、その辺一帯を走り回りました。

すると荒地は耕され、立派な田んぼに変わりました。それからは、米が作れるようになり、村人も豊かに暮らせるようになりました。

神様は

「みんなのためになることをしてくれた猪に、何か褒美をあげないかな」と考えました。

そこで、いつまでも名前が残るように、猪が作った苗代だから猪苗代という名前をつけたという話です。

ざっとむかし、さかえもうした。



01 昔の暮らしの話を語る小松山六郎さん
02 民話劇の最後は、笹になった黄金で村人たちが大宴会
03 第2部を務めた(右から)山田さん、工藤さん、橘さん
04 最高齢の長尾ムツさん(88歳)も見事な語りを披露



語る

「過去から引き継いだものだから、大切に未来へ残していこう」
「町民みんなが語り部になるように」
願いを込め
今日も民話を語り続ける人たちがいる。

いなわしろ民話祭り

昔ながらの民話や猪苗代に伝わる伝説などを今に伝える「第八回いなわしろ民話祭り」は七月二十日、町体験交流館で開催されました。

第一部の民話語りは「民話は暮らしとともに」がテーマ。民話の会の会員が「猪苗代湖と護摩堂山」、「狐の恩返し」などの地域に伝わる民話や昔の暮らしの話などを方言を交えながら語りました。

第二部のなつかしのメロディを唄うでは、町内で音楽教室を主宰する山田たまみさんが美声を披露。喜多

方市の工藤古陽さんがピアノ、猪苗代中学校3年の橘美彩さんが笛、フルートで伴奏し、見事なハーモニーを奏でました。

第三部の民話劇は、民話祭りでは初めての試み。「笹に黄金がなった話」を会員らがおもしろおかしく演じ、町内外から訪れた約二百五十人の観客を楽しませました。

民話の会の取り組み

町の大きなイベントのほぼすべてに参加し、民話の語り続ける「いなわしろ民話の会」。

お客さんの前での民話語りは、会員の資質を向上させると同時に、町内に活動をPRする機会でもあります。

「自分たち会員だけではなく、いつかは町民みんなが語り部になるような町にしたい」と言う鈴木清孝会長。

町内の小学校の児童クラブに出向き、出前講座を実施しているのもその活動の一環です。

「いくら時代が変わっても、いくら技術が進歩しても、人間は人間。コミュニケーションの形が変わっても、顔と顔を向き合わせ、感情を込めて語る民話の説得力にはかないません。子どもたちの笑顔がそれを証明しています」と将来の語り部たちの育成に自信をのぞかせました。

Interview

いつも考えさせられる、とてもいいお話



斉藤 良成さん
猪苗代小学校4年

2年生の時にあったわくわく発表会で「足長・手長」の話をクラスのみんで発表しました。

その時、「足長・手長は本当にいたのかなあ」と疑問に思っ、公民館で何度もこの話を読んで考えました。

民話は僕たちに疑問を持たせたり、調べさせたり、考えさせたりする時間を作ってくれる、とてもいいお話だと思います。

Interview

民話を聞くとときっていつもワクワクする



小鮒 響暉さん
千里小学校1年

おばあちゃんと一緒に寝ると、いつも話してくれます。すると、その話が夢に出てくることがあります。僕も、おばあちゃんみたいに、民話を話してみたいなって思います。

面白い話は、後でおとうさんやおかあさんにも教えてあげます。いろいろな話を聞いたけど、面白いのとか、怖いとか、いっぱいあって、なんかいつもワクワクします。

Interview

これからもずっと語り継いでいきたい



小鮒 マチ子さん
(民話の会会員)

民話の中には、道徳的な意味が込められたものや空想のものなど、いろいろな話があります。

昔の人々の暮らし、方言のぬくもりや地元の良さは、宝物として大切にしたいですね。それを語りの中で伝えていきたいと思っています。

今、民話を聞いている人たちにも、きれいな猪苗代の方で次の世代に語り継いでほしいです。



いなわしろ民話の会

町公民館が開催した、民話講座の受講生を中心に14年に発足。現在23人の会員で活動中。学校や施設などへの出前講座、むかし体験館での定期公演などの活動を通して、地域の民話を継承していこうと日々努力を重ねている。毎年7月、祝日である海の日「いなわしろ民話祭り」を開催。



弁慶の硯石（土田地区）

源義経、弁慶の主従が奥州平泉に行く途中、この場所に立ち寄り、自然の美しさに心を魅かれ、その景観を賞するために弁慶が墨をすり、硯の代わりにしたと伝えられている。

また、異説としてお忍びでこの地を訪れた源義経主従が、金も食料もなくして困ってしまい、この地方でも有数の大金持ちに借金をした。その借用書を書くために硯の代わりにしたのがこの石だったという説もある。

この硯石は、中央部のへこみに常に水をたたえ、どんなに天気が良い日でも枯れたことがないと伝えられてきた。

明治時代に、土田地区のある人がナタの先で石の隅を壊してしまったので、水が流れ出るようになり、それからは水がたまらなくなったという話がある。

守る

放置される民話の舞台。
先人から引き継いだ財産を
このまま風化させてしまわないよう
民話がおかれている現状と
課題を見極めることが必要です。

意外と知られていない町の民話

町教育委員会発行の「いなわしろの民話」には、150の民話が掲載されています。

皆さんは、そのうちいくつかの民話を知っているでしょうか。

町の人に話を聞いたところ、「足長・手長」「北に向かされた亀石」などの有名な話は知っていましたが、そのほかの話になると、知っているという人はあまりいませんでした。

また、話は聞いたことがあっても、実際にその民話の舞台となった場所に行ったことがある人は、ほとんどいませんでした。地元の人でもよく知らない。または、自分は知っているけれど、ほかの人に伝えることはしていない。それではその場所も風化していく一方です。町中に点在する民話は、町民にもよく知られていないのが現状でした。

実際に訪れた民話の舞台は

今回、民話の会の鈴木会長に案内していただき、民話の舞台となった場所を数カ所回ってみ



土津神社の玉石参道
参道の石はどこからどうやって運んだのか、そんな民話を知っていますか。

ました。

すると、観光名所となっている土津神社などを除くと、ほとんどがそのまま放置されている状態でした。

そこまでの道を記した案内板も少なく、道路も荒れているところが目立ちます。やっこのことで民話の舞台にたどり着いても、そこに民話や説明が記された案内板もありません。

貴重な民話の舞台を訪れた人が、ある程度の情報を得ることができるよう案内板。もしくは今まで知らなかったことまで知ることができる詳しい案内板が必要だと感じました。

好きになる大切に

せっかく引き継いだ民話の舞台という財産。まずは地元の人が好きになる。大切にすることが必要です。

まずは民話を聞いてみる。そして興味があれば実際に現場に行ってみる。そうすることで新たな発見があったり、もっと民話が好きになったりするはず。

これだけの民話がある町は、そうはありません。そう考えると、民話は大切な町の文化であると言えます。

北に向かされた亀石（土津神社）

土津神社の境内にある大きな亀石は、土津神社を建立した際に守り神として供えられ、当初は南の猪苗代湖の方角を向いていた。

すると、亀石は水を恋しがり、猪苗代湖に向かって這いだし、背中に乗った大きな石碑を倒したり動いてしまった。城内の家老たちは偉い神官を頼み、亀石に対して「海の主のあなたに湖の見える丘に来てもらったのは悪かったが、土津さまのためにお願いした次第です。これからは北向きを変えてもらうが、もしのどが渇いたり、水が恋しくなったりしたら、社の上にわく圓清水で我慢してください」と懇願した。

それからというもの、北を向いた亀石は納得してくれたのか騒動も起きず、社の守り神として現在に至っていると伝えられている。



未来に残したいものがある
未来に残さなければいけないものがある
わたしたちが考えるべきことは
わたしたちがやるべきことは

繋ぐ



民話語りの会場にもなった
町むかし体験館



「日本のふるさと」としてのまちづくりを進めている遠野市。
年間 200 万人がふるさとの懐かしさを求めて、この地を訪れます。
民話を使ったまちづくり その取り組みを紹介します。

岩手県遠野市 文、写真 遠野市政策企画室 馬場貴之

「永遠の日本のふるさと」をキャッチフレーズに、柳田國男の『遠野物語』を中心とした観光振興を進めてきた遠野市。
市内には、物語に登場する場面をほうふつとさせる田園風景や遺産が今も数多く残されており、「民話のふるさと」として多くの人を魅了しています。

「むがす、あつたずもな…」
優しい語り口の昔話で、訪れる多くの観光客を出迎えるのは遠野の語り部の第一人者、正部家ミヤさん（86）。幼いころ、姉妹で父のひざの上を奪い合うようにして昔話を聞いたという。父が語ってくれた昔話は、生涯消えることのない「宝物」と、父の言葉のまま、多くの人たちに語り続けています。

「大切なのは昔話を語ることではなく、その言葉の意味を理解して、その土地の言葉で語ること。それが自分たちの地域や伝統を知り、誇りを持つということです」とミヤさんは話します。

地域の歴史や文化を学ぼうと、市内では昔話の伝承活動に取り組む保育園や小・中学校も増えています。綾織小学校（高橋正博校長、児童70人）は7年前から、ミヤさんなど地元の語り部を講師に招き、昔話を学んでいます。今年は3、4年生の児童が7月から練習を始め、10月に

開かれた校内学習発表会で、訪れた保護者や地域の人たちを前に、情緒豊かに見事な語りを披露しました。
「昔話はとてもおもしろいし、上手だねと褒められるのもうれしいです」と笑顔を見せるのは菊池海星君（4年）。運萬鍊君（3年）は「初めて知る方言もあり、その言葉の意味を考えながら語っています」と話します。

「今は両親が共働きで忙しかったり、ゲームなど子どもたちの娯楽も増えたりと、昔のように家族で語らう時間が減っています。かつて自分が父のひざの上で昔話を聞いたように、昔話を通じて家族の会話が増え、さらにきずなが深まればいいですね」とミヤさんは微笑みます。

来年6月、『遠野物語』は発行100周年を迎えます。市内では現在、市民の手により、遠野に伝わる昔話を紙芝居にしたり木の絵本にしたりするなど、昔話をもっと身近に感じてもらうとする取り組みが始まっています。

また、昔話だけでなく「歴史」や「食」、「郷土芸能」などの語り部を育て、「語り」でにぎわうまちづくりを目指す取り組みも始まりました。

節目の年に向け、民話のふるさはさらに盛り上がりをみせています。



遠野の語り部の第一人者、正部家ミヤさん



昔話に取り組む綾織小学校の
運萬鍊君(写真左)と菊池海星君(写真右)



綾織小学校児童の発表の様子

民話の中には出てこなくても、 民話や昔語りと一緒に伝えられるものがあります

今の子どもたちもしている集団登校。昔は通学団と言っていました。通学団には、夜学という活動があり、夜になると上級生の家に集まって、勉強を教えてもらいました。終わった後はその家でご飯をぐちそうになります。自分の家と違うごはんの味をみんなで楽しみにしていました。行儀が悪いと怒られるので、それも勉強の一つでした。勉強に使う教科書も「ゆづり本」と言って、みんな

わたちたちが、子どもたちにもたしに民話を話していることも、そういった世代間交流を復活させる、一つのきっかけにしたいと思っています。子どもたちが家に帰って、両親や祖父母にも話を聞いてみたいと思ったら、もう新しい交流の始まりです。子どもは「親の背中を見て育つ」と言われた時代から、「親の背中すら見る時間がない」時代になりつつあります。民話のもつ力を、世代間の交流に生かすことも重要だと思います。

この話を別な解釈で考えてみます。「足長・手長」という妖怪が、政府、藩



鈴木 清孝さん
いなわしろ民話の会会長
(西館)



野口 美枝子さん
いなわしろ民話の会会員
(三城潟)

い なのわしろ民話の会では、小学校の児童クラブへの出前講座を実施して、子どもたちとの交流を深めています。今の子どもたちは裕福な時代に生まれて幸せだなどと思う反面、何だか寂しそうに感じることがあります。

考 えてみると、昔は地域全体で子育てをしていたのかなと思います。近所の人は、どこの子どもものことも知っていましたし、悪いことをしたら、ほかの家の子どもでも怒られたものです。そういうあたたかい地域のつながり、世代のつながりが、今、失われつつあるような気がします。

日 本の中で民話が多いのは、岩手県、北海道、そして福島県です。この3カ所に共通しているのは、面積が広く、経済的にも厳しい環境にあったということです。その中で生きていくために、親は夜も仕事をし、少しでもお金を稼ごうと必死でした。必然的に子どもたちが眠るまで面倒を見るのは祖父母の役目となり、子どもたちは民話を聞きながら眠りについたというわけ

や役人などで、民衆を苦しめています。すると、どこからともなく現れて救ってくれる弘法大師がヒーロー役です。つまり、厳しい環境にいた人たちに、いつかヒーローが現れるよとエールを送っていたわけです。

聞いたことがある民話でも、考え方や勉強の仕方で違うものが見えてきたりする



いなわしろの民話の分布

※教育委員会発行の「いなわしろの民話」に掲載されている 150 話から抜粋

観光資源としての民話

世界的な医学者野口英世、全国的に名の知れた磐梯山や猪苗代湖、点在するスキー場などの観光資源や観光施設に恵まれ、年間200万人以上が訪れる本町ですが、観光客は年々減少しています。今、観光客が求めているものは、懐かしさを感じさせる昔ながらの町並みや癒し。そして、ありきたりな観光施設や観光案内ではなく、ガイドブックには載っていないような情報やより深い知識であると言われています。

民話には、深い知識欲を満足させる教訓や歴史が含まれています。その部分を、既存の観光施設+αの力として生かしていくことが大事です。

点在する舞台つなげる交流

現在、町内には、いなわしろの民話に掲載されているだけで150もの民話の舞台があります。これらを細かく調査し、民話のモデルコースを設定してみても良いでしょう。

か。

案内板やアクセス道路などの整備をし、その後、各地区の民話の舞台をつないで、モデルコースとして紹介します。コースの中に既存の観光施設を入れることで、観光施設のにぎわい創出効果と、参加者の増加を促します。

点在する民話の舞台を線で結び、面を作ってエリア全体で観光客をおもてなしするのもかもしれません。

また、各地区の町民同士がお互いの民話の舞台を見て回るといった、地域間の交流も一つの効果です。

民話を紹介するガイドの育成

ガイドのいなわしろ伝歩人会、歴史を学ぶ猪苗代地方史研究会、そして民話の会が連携を取り、民話、史跡や観光施設とすべての場所ガイドができる人材を育成し、観光に訪れた人をおもてなしするのは良いでしょう。

ガイドブックにまでは載らないですが、頭の中に残るお土産を観光客にプレゼントできるはずです。

取材を終えて

猪苗代の民話は、昔からこの土地で生きてきた民の暮らしそのもので、町全体が舞台だった。ということは、今、この町で生活しているわたしたちも、民話の登場人物であり、民話を作っている最中だといえる。

だからこそ、わたしたちは、舞台であるこの町を愛し、誇りを持って民話を語り継がなければならない。民話は、先人から渡されたバトンなのだ。

そして、先人たちがしてきたように、限られた人だけではなく、町民全員が語り継がなければならないのだ。それは、民話ではなく、みんなができる話「みんな話」にするべきではないだろうか。

既存の観光資源を生かしたまちづくり、町民みんなが楽しく、安全に暮らせるための地域コミュニティの再生、心豊かに生きるための世代間交流、そして新しいことへ挑戦していくこと。次の世代の猪苗代の民話を輝かせるためには、どれも欠かせないものだ。

昔を語る「古き良き時代ー」という言葉があるが、良い時代だったと懐かしむのではなく、そこから良いところを継承し、次の時代に引き継ぎ、「新しき良き時代」を作っていくかなければならない。

わたしたちが生きている今が、100年、200年後の民話として語り継がれる。そんなまちづくりを進めていくことが、民話の舞台に生きるわたしたちの責任なのかもしれない。

特集 民話からみんな話へ 終わり

【参考文献】

いなわしろの民話(町教育委員会)

※いなわしろの民話は、町生涯学習課(学びいな)で販売しています

